

指導教諭 \_\_\_\_\_  
教育実習生 \_\_\_\_\_

日時 2017年 6月 14日 水曜日 第4時間目  
学級 2年3組 場所 \_\_\_\_\_ 教室 \_\_\_\_\_

1 単元名 ギリシア世界—ペルシア戦争とアテネ民主政、ポリスの変容—

2 単元設定の理由

- 古代地中海世界のエーゲ文明からギリシア世界を扱う。ギリシア世界の地理的要因がどのようにその人々の文明形成に関わり合ったか。自然環境と諸文明間に適応していくギリシアの文明を支えた人々と政治形態の変容を考え、政治の在り方・関わり方について考察を深める。

3 単元の目標

- 古代エーゲ文明の過程をへて、ギリシア世界ではポリスという独特の政治形態が生み出されアテネでは民主政が発達した。この成立の過程を探り、人々が都市という共同体の中でいかに生きたかを考える。また、古代ギリシア・ローマはルネサンス以降のヨーロッパで再評価される文明であり、今日ヨーロッパの国々を模倣とした日本の政治・文化・思想にも大きな影響を与えることとなる。そのことを踏まえ、現代の私たちの社会と関連付けながら、考察を深めたい。

4 指導計画

1 時間目	地中海世界の風土と人々、エーゲ文明、ポリスの成立と発展
2 時間目	ポリスの成立と発展、市民と奴隷、アテネとスパルタ、民主政への歩み
3 時間目(本時)	ペルシア戦争とアテネ民主政、ポリスの変容
4 時間目	ヘレニズム時代
5 時間目	ギリシアの生活と文化

5 本時の主題

- アテネ民主政はいかにして発展したのか

6 本時の目標

- ギリシアのポリスの一つであるアテネが、アケメネス朝ペルシアとの戦いを経ることで民主政の完成に至った。貧しい平民層の人々までが参政権を要求できた根拠を知り、アテネ民主政の歩みを理解するのが本時の目標である。

7 本時の準備

- 教科書、資料集、授業プリント1枚、参考文献プリント(コーヒーブレイク世界史)2枚、ミニッツペーパー1枚

8 評価の観点

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
アテネ民主政の経緯や、ペルシア戦争、ペロポネソス戦争について関心をもち意欲的に授業を聞こうとしている。	アテネ民主政の発達について考察し、その歴史的意義を判断する。	資料集やコーヒーブレイク世界史プリントの資料を活用し、考察した内容を表現している。	ペルシア戦争やペロポネソス戦争を知り、アテネ民主政の歩みと関連付けて説明することができる。

8 本時の展開(指導過程)

	学習内容	指導内容	留意点・評価等
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 前回の授業で学習したアテネ民主政のあゆみを復習</li> <li>● 本時の内容の位置づけ</li> <li>● 本時の目標を共有</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 授業プリントの簡易年表、或いは資料集 68 項の年表を見ながら民主政にいたるまでの過程を確認する。</li> <li>● 本時はアテネ民主政の完成とその後衆愚政治に至るまでを取り扱う</li> <li>● 目標:ペルシア戦争とペロポネソス戦争がアテネ民主政の発展にどのように影響したかを捉える</li> </ul>	
展開 10分	<p>アテネ民主政完成の契機となったペルシア戦争はどのような戦いであったか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ペルシア戦争とは</li> <li>● マラトンの戦いについて</li> <li>● テルモピレーの戦いについて</li> <li>● サラミスの海戦について</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ペルシア戦争は、大国であったアケメネス朝ペルシアとギリシア諸ポリスの戦いで、ポリス市民たちの団結力と勇気と知恵で勝利した戦いであると歴史評価されている。</li> <li>● ペルシア戦争の直接的なきっかけ(ギリシア人ポリス、ミレトスの反乱)</li> <li>● アケメネス朝ペルシアの戦争の動機(フェニキア人の交易範囲の拡大を狙う)</li> <li>● ペルシア戦争の経緯について説明する。</li> <li>● 武器を自弁した平民層が重装歩兵となり活躍した戦い。白兵戦を用いるペルシア軍と対比させて説明する。</li> <li>● テルモピレーの戦いでスパルタは負けてしまったが、スパルタ軍の悲壮な戦いぶりに注目する</li> <li>● アテネはテミストクレス率いる艦隊がサラミス湾に誘い込み撃破した。この戦いで三段櫓船の漕ぎ手として、武器が買えない貧しい市民たちも戦争参加できるようになった。このことが参政権要求の根拠となり、アテネ民主政にとって契機となった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ペルシア戦争は歴史家ヘロドトスが『歴史』の中で詳しく書き残していたことを留意させる。</li> <li>● 死者数も参考に重装歩兵の活躍を印象づける。マラトンの戦いは、マラソンの起源となった。</li> <li>● コーヒーブレイク世界史プリント「1 テルモピュライの戦い」を参照させる。</li> <li>● デルフォイの神託を受けており、そのことでアテネは船をたくさん準備していた話をする。</li> <li>● 三段櫓船のしくみ、三段櫓船の乗組員総数、座礁とは何か、ペルシア軍の船の漕ぎ手などを説明しイメージをもたせる。</li> </ul>

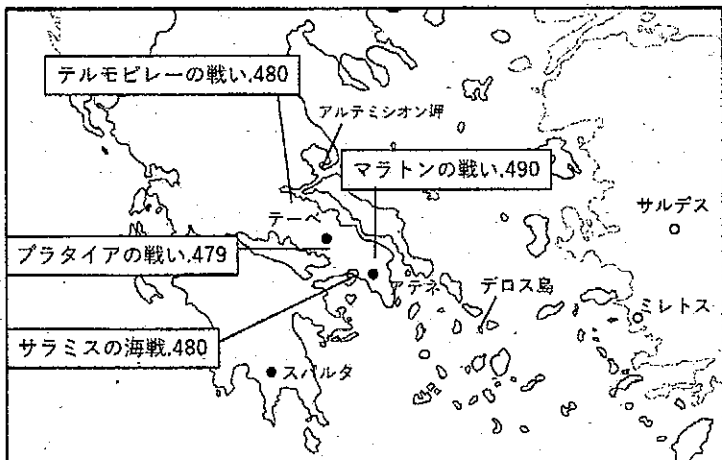
	● プラタイアの戦いについて	● プラタイアの戦いにより、ギリシアの勝利が確定した。	
展開 10分	ペルシア戦争はアテネ民主政の発達にいかなる影響を与えたか		
	● ペリクレスのアテネ民主政完成	● サラミスの海戦で主力となったのは、三段櫂船の漕ぎ手として活躍した無産市民たちだった。彼らの声を受けて、ペリクレスの指導の下アテネ民主政が完成される。 ● 民会は、成人男性の全体集会で、ココで政治の話がなされた。民会は直接民主制であった。また政治をする役割分担をくじびきで行っていたことは、特権身分や政治の腐敗を防ぎ、公平であったという利点があった。(ただし将軍は選挙で選ばれていた) ● 民会の参加者から参政権をもたない人々について考えさせ、現在の日本の民主政と異なる点に留意させる。	● アテネでの成人男性は 18 歳以上の者。 ● 直接民主制と間接民主制の違いを説明する。 ● このようなアテネ民主政は当時の人々も自負しておりそのことがペリクレスの演説によくあらわれている。コーヒーブレイク世界史プリントを参照させる。 ● 奴隷、女性、外国人には参政権はなかった。
	ペルシア戦争後のギリシア世界はどうなったか、ペロポネソス戦争とはどのような戦争だったか		
10分	● デロス同盟について  ● ペロポネソス戦争について	● ペルシアとの再戦にそなえ、アテネを中心とする民主政ポリスがデロス同盟を結成した。この同盟の加盟国は艦船・兵員・軍資金を提供する義務があった。盟主のアテネはこれを背景にギリシア世界における支配権を強めていった。 ● デロス同盟により支配を強めるアテネに対し、ペロポネソス同盟の盟主スパルタは反感を覚えるようになり、ペロポネソス戦争が始まった。 ● ペロポネソス戦争は、ポリス間で戦われたがなかなかおさまらなかった。 ● ポリスを作らなかったギリシア人の一派マケドニアによって征服される	● ペリクレスはデロス同盟の軍資金をアテネのパルテノン神殿の建設費に充てている。  ● トウキユディデスが、ペロポネソス戦争について記述しており、この戦争について詳しく知ることができる  ● 一時期テーベも覇権をにぎる。それは、戦術家エパメイノダスによる功績による。 ● コリントス同盟は、自由自治、相互不可侵、現存政権の維持、私有財

		ことになる。マケドニアはコリントス同盟でポリスを支配下においた。	産の保護などを主とする同盟である。
展開 5分	ペロポネソス戦争はアテネ民主政の発達にいかなる影響を与えたか		
	● ペロポネソス戦争の影響と衆愚政治	● 長引くペロポネソス戦争でギリシアの国土はすっかり荒涼し、農業を営むことが困難となった。そこで傭兵が流行するようになり、ポリスの団結は失われていった。 ● 傭兵に支持されるような政治家が選出されるようになる。この墮落政治のことを衆愚政治と呼ぶ。 ● 衆愚政は民主政とシステム的には違いはないが、それを行う市民達の姿勢が異なる	● 傭兵とは金で雇われて戦う兵士のこと。かつての市民たちの誇りはない。  ● 傭兵は戦争がないと報酬はゼロ。そのため戦いを望むようになり、好戦的な煽動政治家が支持されるようになった。
まとめ 10分	● ペルシア戦争を記したヘロドトスと、ペロポネソス戦争を記したトウキディデスについて  ● ミニッツペーパーの記入	● ヘロドトスとトウキディデスはそれぞれ歴史を記したが、その方法はことなり、今日では前者が「歴史の父」と呼ばれるのに対し、後者は「科学的歴史記述の祖」とされている。この後、授業ではギリシアの文化を取り扱うのでこの二人の歴史家について事前に知ってもらいたい。  ● あまった時間は今日学習した内容やそれに対する気づきや疑問にしようことなどを書き出し、アウトプットさせる。 ● 私自身の感想として、アテネ民主政の歩みは戦争で主力として活躍した人々の変化と関連していることが興味深いと思ったことを述べる。	● トウキディデスがヘロドトスを暗に批判しているのを、コーヒーブレイク世界史プリントの「4 デロス同盟とアテナイの覇権確立」という部分から読み取る。 ● 二人の歴史記述の性格の違いはどちらが良い悪いという判断は的外れでどちらにも良さがあることに留意させる。歴史研究の面白さを伝えたい。 ● 机間巡視する。 ● 質問の受付

## 2 ギリシア

### 1 ペルシア戦争とアテネ民主政

#### 1.1 ペルシア戦争



きっかけ

前 500 年頃、アケメネス朝の支配するイオニア地方にあったギリシア人のポリス、ミレトスがアケメネス朝に反乱を起こした(イオニア植民市の反乱)。アテネがこれを支援していたことに、ダレイオス1世は激怒し、ギリシア本土に遠征軍を派遣しペルシア戦争がはじまる。

① \_\_\_\_\_ の戦い(前 490 年)

アテネ 対 ペルシア

1 万人の重装歩兵 3 万人の軍(弓兵、白兵戦で戦う)

※マラトンの戦いは、マラソンの起源として有名。戦いに勝利したことを一刻も早くアテネに伝えようと伝令兵が戦場からアテネまで走り走り、熱中症で息絶えてしまったという話がマラソンの起源として知られている。

テルモピレーの戦い(前 480 年)

スパルタ 対 ペルシア

② \_\_\_\_\_ の海戦(前 480 年)

アテネ 対 ペルシア

#### ▽アテネ民主政の発達

王政	前 12 世紀ごろ、貴族集住しポリスを形成
貴族政	前 8 紀ごろ、植民市の建設・貨幣の使用→重装歩兵部隊の活躍→貴族政の動揺 前 621 年頃、ドラコンの立法制定
財産政治	前 594 年、ソロン改革
僭主政治	前 561 年、ペイシストラトスの独裁
民主政の確立	前 508 年、クレイステネス改革 ペルシア戦争(前 449 年)
民主政の完成	ペリクレスの時代
衆愚政	前 481 年～、ペロポネソス戦争



ヘロトスと伝えられる像

▽ギリシア最大の歴史家ヘロトスが『歴史』で、ペルシア戦争について詳しく書き残してくれたおかげで、比較的詳しく知ることができる。

▽クセルクセス(前 486～前 466)ダレイオス一世の子。テルモピレーの戦いに勝利したが、サラミスの海戦に敗れ、急ぎ帰国した。

▽コーヒー:「1 テルモピュライの戦い」を読んでみよう

▽コーヒー:「2 アテナイ民主政と海軍力」を読んでみよう。

アテネの③ \_\_\_\_\_ 率いるギリシアの艦隊が、ペルシア艦隊をアッティカとサラミス島の間サラミス湾に誘い込み撃破した戦い。

④ \_\_\_\_\_ の戦い(前 481 年)

アテネ・スパルタ連合軍 対 ペルシア

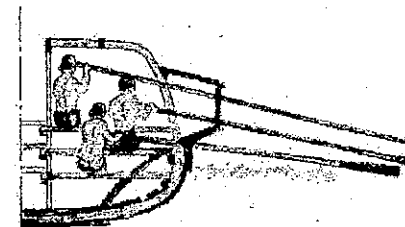
この戦いで、ギリシア側の勝利が確定した

#### 1.2 アテネ民主政の完成

ペルシア戦争の結果、ポリスは怎么样了か?

##### 1.2.1 将軍ペリクレスが民主政を完成させる

アテネでは三段櫓船の漕ぎ手として戦争に参加した⑤ \_\_\_\_\_ の発言力が高まった。



ペリクレスの時代

前 5 世紀半ばに将軍⑥ \_\_\_\_\_ の指導のもと、アテネ民主政が完成される。

アテネ民主政とはどのような政治であったか?

- > 成人男性の全体集会である⑦ \_\_\_\_\_ の最高議決機関化
- > 将軍などを除くほとんどの官職の抽選制
- > 民会や裁判への参加者に対する日当支給

アテネで参政権もたなかった人々はどんな人々か? 考えて書いてみよう

##### 1.2.2 デロス同盟

- ペルシアの再侵攻に備えて、アテネを中心に⑧ \_\_\_\_\_ という軍事同盟が結ばれた。(アテネは盟主となった。)
- デロス同盟はどのような同盟か?

▽テミストクレス(前 528 年頃～前 462 年頃)アテネの政治家。のちにオストラシズムによって追放された。



▽ペリクレス

(前 495 年～前 429 年)「デカ頭」とあだ名をつけられるほど頭が大きかったらしい。それをごまかすためにヘルメットを載せて彫像を彫らせたといわれている。

▽民会

立法・行政・司法上の最高機関。18 歳以上の青年男性市民全員で構成された。

▽コーヒー:「4 ペリクレスとアテナイ民主政」を読んでみよう。

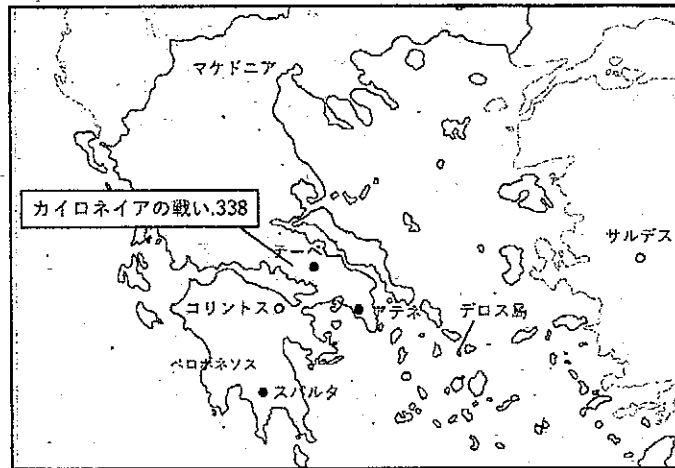
▽デロス同盟は、当初本部がデロス島に置かれたため、そう呼ばれた。

▽ペリクレスは、デロス同盟の資金を財源としパルテノン神殿を建設させた。

- 加盟ポリスは、艦船・兵員が軍資金を提供する義務が課せられた。

## 2 ポリスの変容

### 2.1 ペロポネソス戦争(前 431 年～前 404 年)



- ⑨ \_\_\_\_\_ 同盟の盟主で、貴族政ポリスであるスパルタは、
- ⑧ \_\_\_\_\_ によって勢力を広げたアテネに脅威を感じた。こうして前 431 年⑨ \_\_\_\_\_ 戦争に突入した。

#### 民主政ポリス(代表:アテネ) 対 貴族政ポリス(代表:スパルタ)

- ・はじめはアテネが優勢だが、疫病の流行で⑥ \_\_\_\_\_ を失い、ペルシアの支援を受けたスパルタに敗れる。
- ・前 371 年にレウクトラの戦いで、スパルタにかわり⑩ \_\_\_\_\_ が一時主導権を握る。
- ・アテネは民主政を守りつづけることで勢力を回復する。
- ・ペルシアが、ギリシア人同士が争うように仕向けた。
- ・→ これら有力ポリス間の戦いはおさまらなかった。

#### 最終的にはどうなったか

- ・前 338 年、ポリスを作らなかったギリシア人の一派マケドニアのフィリッポス 2 世が⑪ \_\_\_\_\_ の戦いでテーベとアテネの連合軍を破った。そして、⑫ \_\_\_\_\_ 同盟(ヘラス同盟)にスパルタを除く全ギリシアのポリスを集め、支配下においた。



#### ▽トゥキディデス

アテネ出身の歴史家。ペロポネソス戦争を厳密な史料批判に基づいて記述し、「科学的歴史記述の祖」とされる。『歴史』(トゥキディデスのペロポネソス戦争史。未完。)

▽コーヒー:「3 デロス同盟とアテナイの覇権確立」を読んでみよう。

#### ▽テーベ

アイオリス人のポリス。スパルタの支配に反抗し勝利し、以後 10 年間ギリシアの支配権を握った。

#### ▽エパメイノンダス

テーベの戦術家。斜線陣という新しい戦法を生み出した。

▽ペロポネソス戦争により、ポリス社会はすっかり荒廃し衰退してしまった。

## 2.2 戦争の影響・衆愚政治

- ・ポリスでは、土地を失い市民の身分から転落する人が増えた市民軍に代わり、⑬ \_\_\_\_\_ が流行するようになる →ポリスの団結が失われる。

#### ⑭ \_\_\_\_\_ 政治

ペリクレスの死後、好戦的なテマゴゴス(扇動政治家)が民衆の支持を得、目先の利益を第一に考えるような民主政の墮落した形態に陥った。

表面的には、民主政とは変わらないが、政治に関わる市民の姿勢が異なる。

#### ▽傭兵

金で雇われている兵士のこと。

#### ▽扇動

人の気持ちをあおりたてて、ある行動をそそのかすこと。

▽戦争で農地が荒れ、農業が出来なくなった市民は、傭兵となった。

傭兵は戦争がないと報酬はゼロ。そのため彼らは、賞金のため、戦争が継続することを望んだ。

### 1 テルモピュライの戦い

マラトンの戦いから 10 年後、ペルシアは再びギリシア遠征を試みた。ダレイオスはすでに亡く、息子のクセルクセスがじきじきに遠征の指揮をとっての大事業であった。この遠征では陸海の大軍はエーゲ海の北岸沿いに進み、ギリシアへと侵入してきた。ギリシア側の最初の作戦では、北方から中部ギリシアへ入る際の関門であるテルモピュライでペルシア陸軍を撃退するのはスパルタを中心とするペロポネソス同盟軍であり、他方、ペルシア海軍はエウボイア(※島の名前)のアルテミシオン沖でアテナイを中心とするギリシア連合艦隊が撃退することになった。

テルモピュライでのスパルタ陸軍の勇敢にして悲愴な戦いぶりは、ヘロドトスの史書の白眉のひとつと言える。ペルシア軍の一部が間道を通って背後に回ったため、前後を挟み撃ちにされると覚ったギリシア軍兵士のあいだには、これまでと撤退しようという意見が出てきた。スパルタ王レオニダスは撤退を希望する者にはそれを勧め、自分と部下 300 人、それに彼らと運命を共にする決意をしたテスピアイ人がとどまり、ペルシア軍を迎え撃ったのである。兵士たちは槍が折れれば、刀で戦い、最後には短剣や素手で、さらには歯で噛みついて戦ったが、ついにペルシア軍の矢の雨の攻撃の前、全員が討ち死にした。ペルシア軍の損失も大きく、クセルクセス王の兄弟二人もこのときに戦死している。のちにスパルタ兵士のために戦場跡に立てられた墓碑に刻まれた碑銘をヘロドトスは第七巻第二二八章に引用している。

外つ国の方よ、スパルタびとらに伝えてほしい、おん身たの命に従いて、われらはここ

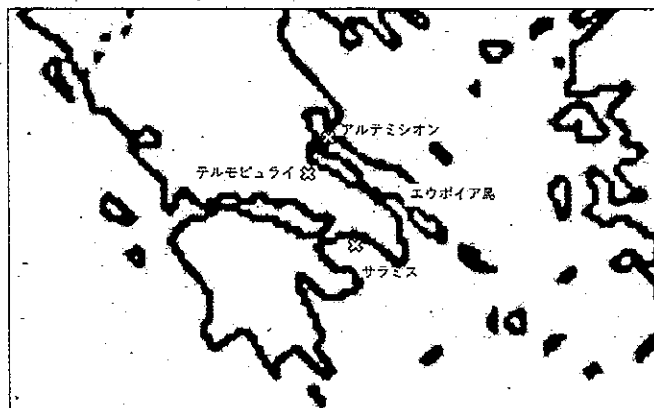
に討ち果てたと。

全員討ち死にしたため、戦死の報せを通りすがりの他国人に託さなければならない、そのようなスパルタ軍の壮烈な戦いぶりをこの碑銘は悲壮な響きをもって伝えている。

ペルシア陸軍がテルモピュライを突破したという報せは、アルテミオンのギリシア海軍にその日のうちに到着した。陸上の防衛線が破られたのならば、海上での防衛も意味がないということで、ギリシア連合艦隊もアルテミシオンを撤退し、ほぼ四日でサラミスへと戻った。

『世界の歴史 5 ギリシアとローマ』、桜井万里子/本村凌二、中公文庫、2010 年、148・150 項より引用。

テルモピレーの戦いでは、スパルタ軍はペルシア軍に敗れる。しかし、この戦いを戦い抜いたスパルタ軍の雄姿をヘロドスはドラマチックに語っている。歴史のエッセンスとして知っておいてほしい。



### 2 アテナイ民主政と海軍力

(前略)それは三段櫓船というもので、乗員 200 名中 180 人までが上下三段に設営された板に腰かけ、合図にあわせていっせいに櫓をこいだ。漕ぎ手は武器、武具を必要としないから、貧しい市民、最下層の市民でも漕ぎ手として戦争に参加し、勝利を国にもたらすことができる。

軍船についてこのような理解を得たうえでマラトンの戦いとサラミスの海戦とを比較するならば、二つの戦闘はその主要な担い手にずれがあったことが見えてくる。マラトンの戦いは重装歩兵の密集戦術によって戦われたから、戦闘の中心にいたのは武器・武具を自分で調達できる程度の経済力のある市民たちである。ところが、サラミスの海戦では貧しい市民でも健康ならば漕ぎ手として戦闘に参加し、ペルシア軍撃退に貢献できた。海戦を勝利に導くにあたって、漕ぎ手として軍船に乗り込んだ下層市民の功績は大きかった。200 隻の三段櫓船に必要なのは四万人であるが、それはアテナイの市民全員が乗り組んでも欠員が出る数だった。アテナイ居住の外国人(メイコイと呼ばれた)や他国からの応援で、全船が充当されたのだろう。

以後のアテナイがギリシア世界の覇者となるのは、その海軍があつてこそ可能だった。その海軍は、漕ぎ手である下層市民なくしては成り立たない。こうして下層市民の発言圏も高まったのである。アテナイ民主政は、前 5 世紀半ばまでには市民であれば、誰でもほとんどの要職に就けるような徹底的な民主政へと移行していくが、それは、このような軍事力の主体の変化と関連があつたのである

### 3 デロス同盟とアテナイの覇権確立(前 5 世紀)

トゥキディデス『ペロポネソス戦争史』(前 431~前 400 年頃) [第 1 巻 97 章]初めのうちこそデロス同盟は独立自治を保ち共同体の会議によってことを決議していたのであり、アテナイはそうした条件下で同盟諸国の盟主の地位にあつた。だがペルシア戦争から今回の戦いにかけて

『世界の歴史 5 ギリシアとローマ』、桜井万里子/本村凌二、中公文庫、2010 年、156 項より引用。

マラトンの戦いとサラミスの海戦では、主力となる市民が異なる。軍事力の中心の変化が、民主政の移行と関連していることを読み取ろう。

『世界史史料 1 古代オリエントと地中海世界』、歴史学研究会・編集、岩波書店、2012 年、187・188 項より引用。

この文章で「私」とは、トゥキディデスのことである。「私があえて本論から～」の部分では、名指しはされていないものの、暗にヘロドトスを批判している。トゥキディデスが「科学的歴史記述の祖」と称される由縁を読み取ろう。

トゥキディデスは、所謂「五十年史」と呼ばれる期間(ペルシア軍撤退からペロポネソス戦争勃発までの期間)の記録が、その重要性にもかかわらず意外に少ないことを批判している。

までの間にアテナイは次のような多くの出来事に、戦争においても政治的紛争解決においても、直面することになった。すなわち、ペルシア人とアテナイ人との間に興った紛争、アテナイ自身の同盟国の離叛、およびペロポネソス諸国がことあるごとにもいつでも介入してきたことである。

私があえて本論から逸脱してこの間の事情を記述したのは、以下の理由による。すなわち、私以前の歴史家たちの記述にはこの時代のことがみな欠落しており、彼らが記述したのはペルシア戦争以前のギリシア史か、さもなればペルシア戦争そのものかのいずれかだったからである。ヘラニコスは『アッティカ史』の中でまさにこの時代のことがらには触れてはいるのだが、彼の言及は短いうえに、年代の点で不明確でもある。この時代を語ることはまた同時にどのようなやりかたでアテナイ人の支配権が確立されたのかを開陳することにもなるのである。

#### 4 ペリクレスとアテナイ民主政(前5世紀)

トウキュティデス『ペロポネソス戦争史』(前431~前400年)

[第2巻37-39章]われわれが従う国制は、他国の制度に追随するものではなく、他人をまねするよりむしろわれわれ自身が人の模範なのである。われわれの国制は、少数者のためではなく、多数者のために統治するがゆえに、その名を民主主義と呼ぶ。個々の人の利害が衝突した場合、法律の面ではだれも平等の権利に与る。だが他方、人の評価という点では、各人が何かに秀でているかぎり、国事への貢献よりも身分家柄で評価されるということなどなく、たとえ貧困であっても各人が国家に対して何か役立てる能力があれば、国制への参加をさまたげられることはない。

われわれは、国家共同体の事柄についてのみならず、日々の生活をめぐるおたがいに對する思惑についても自由な市民生活を送っている。だから、たとえ隣人が自分の好きなように何かをしても、それに腹を立てることもないし、また白眼視することで実害はないが苦痛となりそうな重圧を隣人に負わすこともない。

私生活ではこのようにたがいにわずらわされず交際しているが、公的生活では、われわれは何よりも法を犯すことを恐れる。それは、その時々政治の要路にある人にもみならず、方にも服従するということである。それもとりわけ、不正な目に遭っている者を救うために定められた制定法のみならず、たとえ成文化されていなくても、われわれが共通に認知する廉恥の情をもたらしうような不文の法に従うのである。(中略)

さらにまたわれわれは、軍事教練の配慮に関しても、次の点で敵とは異なる。なぜならわれわれは、わがポリスを万人に開放しており、もし秘匿しなければ敵に見られた相手を利するかもしれない知識や光景があったとしても、外国人排除を布いてそれらを他人に見せぬなどということは一度たりともないからだ。われわれは軍備や策略などよりもむしろわれわれ自身の内からわきおこる戦争遂行に対する勇氣にこそ、信に措いているのである。また教育の面でも、敵方がまだ若いうちからすぐに、苦痛の多い教練によって勇武を追求するのに対して、われわれはのびのびと規制を受けずに生活しながら、同じ程度の危険に立ち向かってゆくことは敵に勝るとも劣らない。その証拠に、ラケダイモン人たち今回わが国の領土に侵攻してきた時も独力ではなく同盟軍を残らず率いてやってきたのに対し、われわれは他の助けを借りずにもたやすく他国の領土に侵入をしかけ、自身の領土財産を防衛せんとする敵と他国領内で戦っては、いつでもこれを征服しているではないか。(後略)

『世界史史料1 古代オリエントと地中海世界』、歴史学研究会・編集、岩波書店、2012年、189-190項、より、引用。

この文章は、歴史家のトウキティデスがアテネの民主政の指導者ペリクレスが行った演説を採録したものです。アテネ民主政の理想を高らかに謳った演説として名高い。アテネ市民が自らの政治形態を誇りとしていた点が読みとれる。後半では、スパルタの政治形態と比較して、自らのやり方を賞賛している。

(一見すると近代的自由概念に似ているが実際には、国家による介入が及ぶ部分もあった。また演説の内容と、現実の間にはある程度は離れていることにも留意すること。)